

「古代からの手紙」に寄せて

東京造形大学美術学科教授・彫刻家 大橋 博

河明求は、韓国の大学で陶磁器を専攻し作品制作を通じ韓国における近、現代の陶芸文化の変化について様々な疑問を感じるようになった。特にアジアにおける現代陶芸の礎となる「走泥社」の活動に深く感銘を受け、日本への留学を決意する。

京都市立芸術大学大学院へ入学後、京都陶芸の歴史や人物を調査し、器の制作を行うが、修士2年時には同市より奨学金を受け、イギリスの Royal College of Art へ交換留学の機会を得ることができた。

イギリスでは日本の近、現代陶芸と密接な関係を持つバーナード・リーチとルーシーリーの研究を行うことにより自作の幅を広げる機会を得ただけでなく、現代美術と陶芸の関係や国際的な工芸家の活動にも興味を持つようになった。大学院を修了後にとあるきっかけがもとで埼玉県朝霞市のレジデンス施設、丸沼芸術の森に所属することになる。

現在は韓国と日本の持つ土地の記憶をドッケビ（日本での鬼のような存在）というモチーフにより作品制作を展開している。また、作家と社会をつなぐ活動として日韓の国際交流展やアーティストインレジデンスプログラムを実現するなど、両国の交流のために様々な活動を行っている。

以上のような活動を行う中、2021年度より東京造形大学大学院博士課程において作家としての思考を深く掘り下げるため、「古代土器の特徴と自作について」の研究を行うことになった。

主に日本海を通じてダイナミックな交流が行われたであろう3～7世紀に焦点をあて、現在の河自身の活動と照らし合わせながらの研究テーマである。「両国における人流によりつくり出された様々な美術品にはどこか懐かしい人々の営みが見て取れるばかりでなく、現代へと繋がる大切なメッセージが込められている」と考える。そして、これは彼の作品制作における原点回帰というだけではなく、韓国と日本をつなぐテーマでもある。

2021年10月4日から10月10日まで埼玉県朝霞市に所在している丸沼芸術の森で開催された「古代からの手紙」という河の個展DMイメージにもなっているマスクをつけた埴輪の人物は古代に思いを馳せる彼の姿なのか、あるいは現代を俯瞰する古代人なのか。いずれにせよそこに佇む人形（ひとがた）の焼き物は時空をすかした語り部として私たちの記憶にアプローチする。そして今日もまた我々の営みは未来へ向けた手紙となってポストへ投函された。